いまばり探求 乃万（のま）

乃万地域には、大型で意匠性に優れた鎌倉時代後期～南北朝期の五輪塔・宝篋印塔・宝塔が数多く残されています。このうち16基が国の重要文化財（以下、国重文）指定を受け、中世石造物の宝庫です。

造立の背景には、当時の今治が伊予国府（府中）で、海上交通の地の利を得た港湾都市であったことや、石塔造立を得意とする西大寺流律宗の布教活動や凝然の存在などが考えられます。

乗禅寺石塔群（すべて国重文）※延喜

鎌倉後期～南北朝期に造立された11基の石塔群（五輪塔4基・宝篋印塔5基・宝塔2基）が1ヶ所に整備されている。3基に紀年銘が刻まれ、宝塔基礎の円形反花座には地方色が見られる。

凝然（1240～1321）

※画像は東大寺所蔵

鎌倉時代に、旧仏教の復興に尽力した今治出身の宗教家で、『八宗綱要』の著者や華厳宗中興の祖で知られる。東大寺戒壇院主や唐招提寺管長を務め、朝廷から国師号を賜るほどの高僧であった。

※『八宗綱要』は、奈良仏教の南都六宗と平安二宗の天台・真言宗を学ぶ教義書。

❶覚庵五輪塔（ともに国重文）※野間

銘文は刻まれないが、鎌倉後期の造立と考えられる。高さは2基ともに2mを越え、石材は花崗岩。田圃の中に立地し、地元では戦国武将の夫婦墓として祀られている。基壇は三段の切石造り。

❷馬場五輪塔（国重文）※野間

地輪側面に銘文が刻まれ、嘉暦元（1326）年に紀氏娘の供養塔として建立されたことが分かる。その紀氏とは、当時の伊予国府の在庁官人クラスの人物と考えられる。高さ2.5m。❶と違い、基壇が繰型座。

平成元年に解体修理をした際、銘文内容と一致する25歳前後の女性人骨と木製五輪塔が見つかった。

❸長円寺跡宝篋印塔（国重文）※野間

塔身背面に銘文が刻まれ、正中2（1325）年に弥勒菩薩信仰に基づき建立されたことが分かる。高さ3.6mの大きさで、基礎と塔身の間に受け座を有する“越智式”の意匠で有名。隅飾りは別石。

尾道の浄土寺や大三島の大山祇神社にも越智式が現存。同様式は、しまなみ海道地域の地方色といえます。

野間神社宝篋印塔（国重文）※神宮

塔身に銘文が刻まれ、元亨2（1322）年に紀氏らが除病延命を願って建立したことが分かる。高さ2.8mの大きさで、相輪は後補。❸の石塔同様に“越智式”の宝篋印塔で有名。

同神社の春の例大祭は見応えがあり、獅子舞・継獅子など乃万地域の各種伝統芸能が披露されます。